



里見八犬傳
拾四編
卷卅下



拾口編み去るし内

年下

松野

勝首院

第百五回

定正將を連て水陸大軍を起す

姑且して義成主の又大士等あち向ひて親兵衛の事のも各一撫の意
 見ありて再議を寛くまて死に我又別れ思ふあり。屋敷素藤伏誅の
 後封内安房に似れども治小居と乱を忘れざる。古今良將の小心あり。
 知今戦國の時小當り。一日も燕居をせざる。安房上總下總は是他
 州小勝りて稲穀の熟早けれ。十月より正月まで農夫們皆耕稼暇
 あり。教せりて戦ひは是と番事と云。經文あると等閑なり。よく思ひ
 後悔ありん。既初冬ふ幾日もある。宜く民の水陸の閉戦を指目せべし。
 この美上總の諸城主への徇示して促し。當國の汝等七名七隊小備
 へ。民を教へよ。然れども降國を憚りぬれば陸を獸獵をせよ。水の中

漁捕は假托を以て其の美を約ふ者也諸事の異日沙汰ありん先より
あの意を以てよかりと示しぬ信乃道節毛野莊介大角現八小文五呂也
皆共侶の稟を以て臣等當國に召よせしれりとのるもるもるも
可惜光陰の過ぬるを本意を思ひひきつる仰を兼ふれるも素
より願ふ所なり但し惣大将出まされば諸民始より信服せざる如
く使ふに進退軌を失はざるもの美の什麼と問まるを義実主より其
美も安房殿主張あり其習陣の都尉の太郎義通ありはべり他の童
年十一歳尚成人に至るなれども今より諸彦を師とし學び後の裨益ある
を多けんことを宜く教てよと負ふもの大士等の阿と心々額を衝きてその美の
臣等いりふして及ぶふれぬも辭しなむ不忠に似たり左中右も大馬の
力を盡して仕なさんと異口同様多言美は義成主も歎びて餘談小及

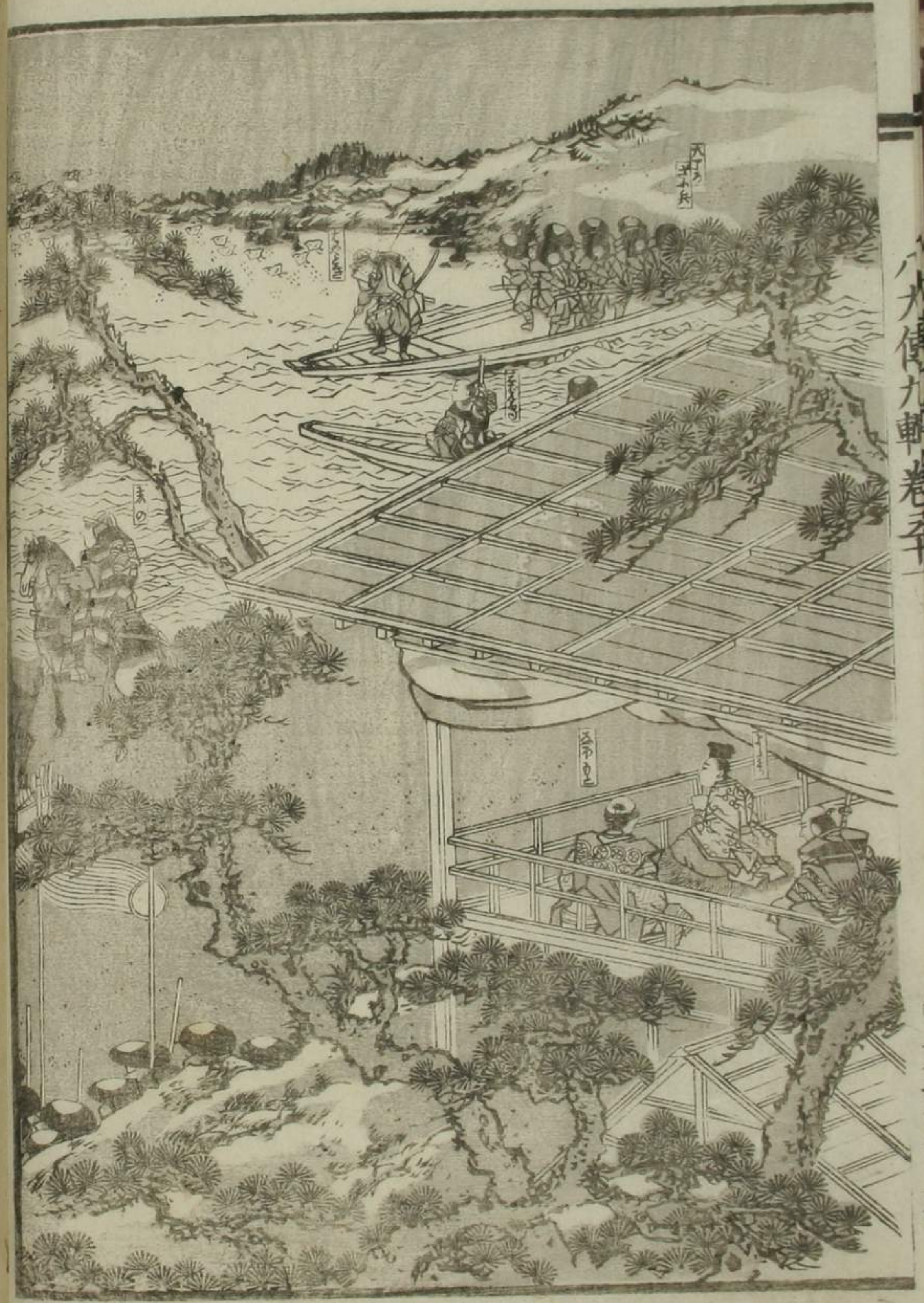
びのひける語次道節がのち既に知せぬと扇谷定正主と臣等が故
主の冤家ある今茲の春正月廿一日義兄弟等の資助を以て聊怨を復
す折信乃が五十子の城を抜ける奇功あり其後又料も大江親兵衛が
俱にりと云那河鯉佐太郎の政木大全孝嗣の事もいへば定正主羞怨
とて臣等が往方と情と地も索るものいん丹を怕るものいんども這杖桑の
二國は是東南の一隅なり隣國の虚実を撈り易くをいそ問謀見増て
毎那那地在りゆめあり便宜ありとのい小文五呂も亦いさう下總市河の舟
長ゆ大江屋依久と暎倣と杜伎の親兵衛が親山林房八の迹強繼
考今も猶那那里在り丹が妻水滸の妙真の姪ゆ支婦共其本性
老実見でいへば是美も他が訪來ゆ折件の一美も其は示さ敵地の狗見
充ひは他ハ河船を乗走し武藏下總下野を造りぬ処る者不

此敵の秘密を知らず。便宜間諜見ふ勝り。謀り易くやいむ。と告
 ぐ。義成主より。開の亦定か便宜のめん。我亦那管領の境を犯す
 る。あらん。秋と思ひさる。あらん。この山幸海幸も。其頭の非常の備を為
 する。我より間諜見へ使へ。敵も亦間諜見して。我虚実強弱を撈らる
 べき。然れば武を耀し。成を固く。且仁政を宗とし。地の利と人の和
 大敵も亦怖る。不足らる。然るも。那河鯉の改木孝嗣及次國太
 郎。三とやら。の衝舟入水のさえり。他們素藤伏誅の時。大江親兵衛
 従ふ。軍功あり。とす。左右川の厄あり。見らる。も。あらん。は。不
 便ふ。と。あらん。憶ふ。嗟嘆あらん。道節莊介小文五郎の慰難。惆
 然。信乃毛野現。大角も。未見の士卒を忘れ。言今。他們不及。その
 現良將の仁慈博愛。の君を。誰らあらん。思へ。俱敬服して。その

欽び。京に。侍而餘談も。果。照文の休暇二十日の勲勞を賜ふ。
 七武士と相伴。義実主。又。俱。日替春。瀧田。還り。あらん。の。度
 議を。妙真。音。日。東。の。單。節。の。親。兵。衛。が。安。危。代。四。郎。の。上。左。右
 ら。右。や。と。思。ふ。の。心。有。繫。不。慰。難。只。音。耗。を。松。の。戸。小。葛。丹。葉。を。秋
 書。て。其。又。稻。月。中。を。あ。ら。け。侍。り。一。程。有。司。們。人。馬。調。煉。の。下。知。を。以。て。安。房
 四。郡。の。村。正。と。莊。客。の。徇。侍。へ。水。陸。共。に。准。備。あり。山。火。假。屋。を。構。へ。且。鹿
 寨。と。為。り。と。ま。又。浦。邊。虫。多。く。漁。舟。と。取。取。て。楚。國。の。競。渡。の。擬。せ。と。さ
 たり。安。房。の。春。寒。く。冬。暖。る。ふ。然。ゆ。で。も。十。月。の。小。春。と。唱。て。暮。春。の。優
 在。日。和。多。け。れ。那。宋。人。の。不。龜。の。茶。を。兵。官。の。徴。め。水。戰。を。差。次。ま。さ
 馬。を。涸。せ。海。を。渡。り。船。を。競。り。て。先。を。争。ふ。士。卒。ら。も。不。聚。合。り。小
 程。不。義。通。御。曹。司。の。杉。倉。武。者。助。直。元。田。税。戸。賀。九。郎。逸。時。苦。屋



七犬士海
 邊の
 水戦を教
 煉七

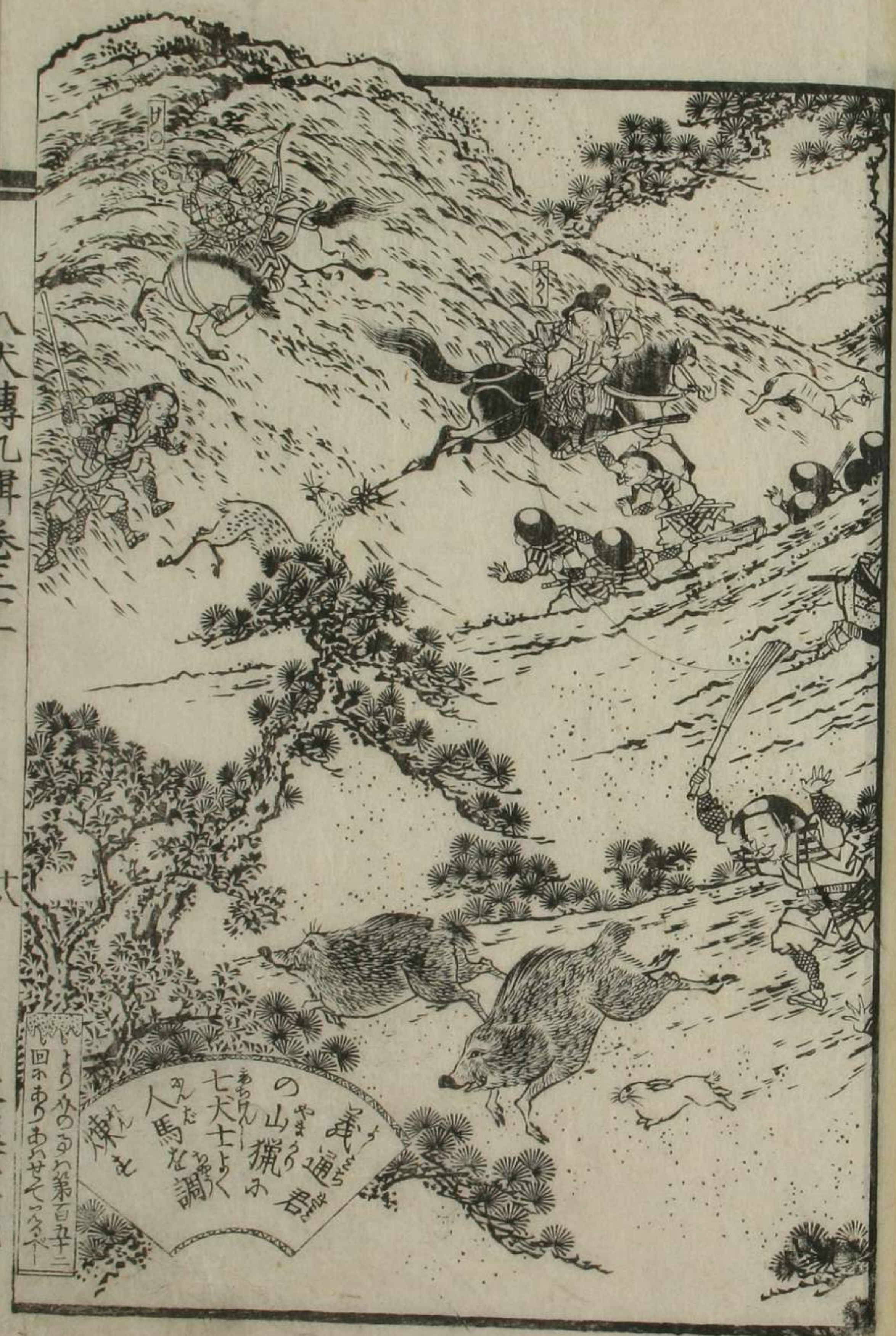


八代傳九郎卷五

八郎景能等勇士都々十數名。雜兵五千餘名。皆共侶。不從。少件の
 浦邊。不中。多れ。七犬士も。俱。不。武器。を。救。正。へ。馬。不。跨。り。伴。當。と。領。て。參
 する。その。中。の。水。戲。水。馬。の。犬。阪。毛。野。犬。塚。信。乃。犬。田。小。文。五。口。犬。飼。現。八
 特。不。勝。ま。ま。人。の。視。を。驚。く。ま。ま。と。い。ふ。と。ま。ま。又。犬。山。道。節。犬。川。莊。介。も。亦
 拙。り。を。獨。犬。村。大。角。の。下。野。を。成。長。り。一。六。水。戰。を。疎。り。と。あ。の。時
 勉。く。習。得。て。敏。く。其。技。を。能。し。け。り。既。而。一。と。十。月。も。二。十。日。あ。り。あ。る。り。一
 時候。水。戰。の。調。煉。果。一。六。直。元。並。不。七。犬。士。等。の。又。義。我。通。不。俱。一。ま。り。と。く
 山野。不。造。り。て。獸。獵。を。義。成。隊。下。知。る。の。中。昔。日。者。唐。山。の。湯。王。と。雀
 羅。と。の。小。禽。を。捕。る。其。之。方。を。張。り。一。方。を。張。り。を。入。る。者。の。入。れ。逃。る
 者。の。逃。げ。よ。と。い。ふ。と。是。仁。人。の。做。を。所。必。か。く。の。如。く。る。べ。し。然。今。番。の。獸
 獵。は。是。軍。陣。の。習。学。を。れ。ば。必。獲。と。會。り。と。無。益。の。殺。生。ま。ら。ず。猛。獸。の

工藤景光
 光を或は
 下河邊
 行光小作
 東鑑を
 正一と

人を怕る。逆。來。ぬ。る。を。射。く。斃。ま。す。も。逃。る。を。趕。き。殺。ま。す。但。生。拘。る。
 第一。一。或。の。又。傷。る。も。殺。さ。る。を。其。亞。と。せん。在。昔。建。久。四。年。五。月。二
 十七日。鎌。倉。の。右。幕。下。朝。の。畝。獵。小。工。藤。莊。司。景。光。の。山。鬼。の。大。鹿。不。變。見
 ま。と。射。ける。祟。ゆ。那。身。の。累。不。疲。死。け。り。鍊。是。を。思。ひ。ひ。か。ひ。ひ。と。言。可。叮
 寧。不。試。め。の。ひ。七。犬。士。及。直。元。等。も。俱。不。感。服。一。て。昔。は。違。ひ。を。士。卒。並。不
 列。卒。小。傳。へ。其。殺。伐。を。制。め。て。然。七。犬。士。の。射。る。所。百。發。百。中。る。ゆ。い
 る。故。ら。猛。獸。の。只。其。四。足。を。射。て。滾。り。て。是。を。列。卒。小。生。拘。と。せ。然。も
 あ。ぬ。毛。屬。の。或。の。其。尾。を。射。て。損。し。其。耳。を。射。断。る。の。も。諸。獸。小。大
 と。多。并。て。其。弓。勢。小。駭。怕。ま。走。り。阿。容。々。と。して。生。拘。る。ゆ。日
 毎。小。數。十。頭。之。れ。直。元。逸。時。景。能。等。の。一。士。卒。の。武。藝。有。る。者。も。皆
 七。犬。士。を。師。と。し。習。ふ。敢。殺。伐。を。旨。と。せ。然。れ。の。時。義。成。主。復。下。知



よりみのめ第百五十二
回ありあせつてつて

の山通
あつた
七犬士
馬を調
人馬を調
あつた

八代傳九轉



八代傳九轉

あつ。人を害する豺狼稻穀を鼠を猪鹿を飽ちて喫せし後載て遠に
 嶋嶼へ流せし。一箇も殺しぬるり。伊豆相摸の漁夫を以て這仁政を傳
 へ。感一慕ぬるり。左右を程久冬も既。十一月中旬。小宮り。時候有
 一朝。龍田る義実主の猛可。蟹崎照文を召て告め。我親兵衛と憶
 ふ故。昨宵殊る夢を見。壁に大江親兵衛も。今番の獸獵の隊小
 在。他皇國の獲るる。虎と射。斃せし。引提。我見。まると
 思へ。忽焉と驚。覺けり。夢の五臟の煩ひ。佛經の世の果敢。なす。小
 壁。て泡沫夢幻といふ。遮莫周禮。六夢の説あり。則其官を置く。占
 夢。ひく。其吉凶を知る。最も故。然。上古の天朝。の。あ。の。あ。の。宗
 神天皇の即位四十八年の春正月天皇。則豊城命と活目尊。勅詔
 あり。各其見。夢縁り。天日嗣の大位を定め。り。書紀。見。え。り。

その他夢小由。吉凶あり。因史及諸書。載られ。と。枚。奉。の。自。違。あ。ら
 せ。開。小。擬。ら。て。あ。あ。あ。ね。ど。只。虚。夢。と。の。と。ま。く。く。虎。の。猛。悪。の。獸。人。の
 殘。忍。奸。虐。る。と。則。虎。狼。野。心。と。い。へ。親。兵。衛。今。在。京。師。在。り。て。虎。狼。小
 等。一。た。奸。人。の。苦。一。ゆ。ら。く。と。も。あ。る。兆。る。死。疾。あ。り。と。や。夢。寐。と。い。へ。ど。も
 快。く。も。因。て。我。又。思。ふ。り。あり。親。兵。衛。が。安。危。を。知。ん。と。て。間。諜。使。を。遣
 へ。て。後。暗。に。所。必。と。い。ひ。あ。明。々。地。小。使。を。り。亦。復。調。貢。を。献。り。室。町
 殿。小。請。宣。し。て。親。兵。衛。を。召。取。ふ。許。さ。る。と。さ。る。と。や。と。思。へ。と。も。又。ヨ。ク
 資。財。を。費。す。ま。あ。ら。ざ。れ。ば。い。く。た。所。為。る。れ。我。口。親。安。房。殿。小。如。此。せ。よ
 と。い。ひ。さ。り。汝。先。稻。村。小。赴。せ。家。老。毎。小。情。地。小。告。て。他。事。も。宜。か
 べ。と。い。ひ。左。も。右。も。計。ひ。て。よ。と。亦。他。事。も。課。ま。れ。照。文。深。く。感。服。し。て。
 親。兵。衛。が。京。師。の。安。否。を。信。ま。し。脚。心。小。撰。ま。る。脚。慈。孫。と。ま。ら。ま。

ともの上やひて。仰美りひぬ。徑小稲村の参上り。宜く計ひらむ。答
稟し退れ。いそぐ稲村の城に赴け。則辰相清澄の老館の御意
箇様々々と件の一義を告ぐ相譚ふ辰相も清澄も俱に感佩して異
議あらず。徳も敦に御賢慮を館の推辭とぬえや誘ふ稟上んとて
隨即照文と共に義成主の身邊におあり。件の義を告ぐれば義成
徐に听果く且感し。且其勢大なるを。則答のまう。今兼依老館の
御賢慮の愚意も亦相同ト。喬又京師へ使を遣して。請ぐ親兵衛を召
取ん歎とて犬氏等も意見を伺ひ。毛野及自餘の六犬氏も皆只寛の一
字を是として。別議るれば黙止せし。それより一々五十日あまる。歴ぬる今
まぐ信るに。必是故あるべし。然に再度の使として。親兵衛を請高へとも。
性急と云へく。且陰のその一義を陽の主上を首なり。室町東

山の両公へ再度の調貢を獻る。忠信の我真面目で。數千金も惜む
足らぬ。遂に唐山の故事と思ふ。般紂が境暴る。西伯文王。姜里の囚
も美女と數千の宝貨として償ゆる例あり。今戦世と云へども。那紂王
が時。似を聖皇賢相上にお在せ。管領の私議も亦。仍れる所あり。徳れ
這回も又五千金と齎して京師へ使をまわらせむ。十一郎の罷還りて。その義を
老館へ稟せし。犬士等の出で郊外にお在り。然るを今召上せて。告て再議の
及ぶもあらむ。老館の御意忝ければ。他們も感服せし。んや山獺果と
來ぬるを告ぐ。告るとも遅し。久し。就く又一議あり。今番の使も別人ら
要る。十一郎の歸國の後。久し。最大義を思ふべけれど。亦復那
地へ赴け。事よく計り。親兵衛を相伴せ。來るか。と亦餘義もわかれ。君
命。照文の唯々と。額衝に美く。稟せし。仰美りひとも。先度の正

使の親兵衛あり。又代四郎の帮助あり。あつりて臣等も亦副使の失る。苛
 子崎の賊難。京師の首尾も皆便宜とゆいひ。今度の先度、弥増
 の特、大事の御使より短才、浅慮の身、單々、數千金と齎の船
 更、海賊と殺攘ひ陸、京家の禁錮を解いて、親兵衛をおく還、
 大任をよく仕らんや。千里の水行を幾十回往復仕り、開を辭ひ、
 あつりて、任重くして力不足ぬを、知りて、仰ひ従ひ、
 賢慮を仰せ、
 其議も謂あり。其副使、何人を欲得遣さ。六郎兵庫助の思ひ、
 やと、向、
 愚按、
 郎、
 城を拔き、命を免れ、逐電、
 衛の隊、
 堵、
 て、
 兄、
 六、
 あり、
 照、
 願、
 よ、
 俱、

城を拔き、命を免れ、逐電、浮浪孤獨の身を托き、大江親兵
 衛の隊、素藤伏誅の日、軍功あり。あつりて、
 堵、
 て、
 兄、
 六、
 あり、
 照、
 願、
 よ、
 俱、

人を走らば召來して吩咐先這美をいそぎを折る件の時景能
 御曹司の御使を立てて獵所より参入りし。その時義成主の時
 便宜を執ひぬと大なるを隨即逸時景能を縁頼へ召よせし。使の所以を聞
 ぬ。是則別義あり。義通君昨日獵所の山路中。料を靈芝をゆひけり
 其の靈芝の根あり十葉の疑ひもなき祥瑞なれば。靈芝をゆひけり
 使の美を舒く。靈芝を近習の逸時と義成のよも見ゆ。辰相清澄
 等。宣ふ。靈芝の世稀なる。我是を憎む。あねど約莫人の君なる者
 漫の祥瑞を執べ。奸民屢奇を呈す。利禄を欲まふ。至るる。在昔唐
 山後漢の光武の中興の時。年毎の祥瑞の来り。皆退け。賞せむ。いへり
 後漢の君の誰も徳をばへ。思へも義通が孝養の一端。る。靈
 芝の十一郎。預けて。老館に見せ。なりて。御用る。是も亦調貢の一種。備

へ。又六郎兵庫助の件の一義を戸賀九郎と八郎云渡して。逆旅の準備を
 いそぐ。獵所へ別人を遣して。反命を致さむ。あ餘の所要の箇様々々と
 言叮寧。命。大家俱。言美して。打連立を退け。徳而辰相清澄の
 照文と俱。逸時と景能を別席におく。退けて。今番又。蛭崎。照文を。京師へ
 御使を遣さる。小より。逸時と景能。副使を仰付ら。其故。徳と大江親
 兵衛を償ふ。死事の趣を演。逸時。景能。相執。て。京を。臣等。の
 量。大江親兵衛の好意。馬。會。秘。の。恥。を。雪。む。い。へ。の。統。附。驛。の
 小功。を。然。る。を。思。ひ。け。さ。り。徳。一。大。事。の。副。使。を。奉。り。い。の。一。期。の。面。目。の。上。や
 以。死。繼。去。向。小。難。義。あり。とも。命。を。涯。り。か。仕。ま。う。ん。相。あ。ら。る。く。い。と。異。口。同。様。か
 言。美。して。躬。宿。所。へ。退。り。け。り。の。故。辰。相。清。澄。の。則。兩。個。の。青。侍。を。逸
 時。景。能。の。代。と。し。て。猛。可。の。獵。所。へ。遣。し。隨。即。這。入。を。り。直。元。と。七。大。士。等。も

事の趣を告知して義通君へ儀のどく反命を果させけり。介程の登崎照文の件、
 靈芝を伴當所持して瀧田へ入り奉りて、隨即義実王へ見参りて、御本意の如く京
 へ遣さる御使を照文又奉りて、逆時景能等と俱に水路を那地へ赴くべしとある。
 館の仰及御答の旨様々々。又その靈芝の御曹司の獵所の山路を得せぬ。
 かの美の亦箇様々々と都々那意を告まらる。躬に靈芝を見せぬ。義
 実王の然びふ。先其靈芝を見五宗。実王は一根ありて十莖あり。その
 第四莖と五莖と第十莖の短くて凋然と。其色異之故。故は哉。百十數年の
 後の世に這祥瑞の如く。僅小の者。偶然に之を悟る。もあむ。天機の量
 知るべも。され。這時誰か思ひぬ。義実王の奇く。この稱。惜る。心。く。を。依。照
 文。返。り。ゆ。け。り。然。ば。又。姉。真。音。音。曳。も。單。節。の。親。兵。衛。代。四。郎。の。安。危。淺
 の。思。ひ。不。悞。々。存。け。る。小。老。館。の。御。慈。愛。も。又。照。文。逆。時。景。能。も。京。師

へ使を奉り親兵衛を債取せぬ。館の仰。悠々。と。傳へ。少。知。相。賀。び。て。左。中。右
 中。も。兩。館。の。御。恩。と。あ。ふ。俯。て。思。ひ。仰。せ。ま。れ。鹿。野。山。の。樹。根。巔。も。數。る。七。浦。の
 澳。も。と。あ。ふ。と。傳。稱。照。文。の。宿。所。も。見。て。主。人。の。妻。あ。た。り。日。と。か。り。來。り。日。と。向。
 遙。け。た。水。路。の。行。を。勞。ひ。且。慰。め。け。り。介。程。有。司。の。京。師。へ。調。貢。の。下。知。り。て。
 夜。と。す。く。日。と。す。く。急。に。一。く。僅。小。の。四。日。あり。東西。咸。整。ひ。け。り。其。件。々。の。黃。金。五。千。兩。
 名。刀。五。口。柘。弓。二十。張。征。箭。五。百。幹。鐵。砲。三。挺。並。塩。鷹。五。拾。雙。乾。鯛。五。
 拾。櫃。綿。五。百。屯。麻。五。百。把。是。れ。あ。の。日。照。文。逆。時。景。能。の。召。れ。て。君。侯。成。見。參。を。
 義。成。則。仰。せ。る。旨。あり。其。第一。條。の。今。番。朝。廷。棋。家。並。室。町。東。山。殿。へ。進。上。
 する。貢。物。の。八。犬。士。の。姓。氏。勅。許。の。朝。恩。の。答。奉。る。べ。し。為。す。且。大江。親。兵。衛。歸。
 東。の。暇。を。賜。ら。ん。と。願。ひ。稟。上。す。あ。れ。も。機。臨。と。變。ふ。心。を。損。益。用。給。ある。
 べ。れ。胡。意。貢。進。の。諸。目。録。と。呈。書。の。相。渡。さ。る。因。て。右。筆。大。岸。法。六。郎。を。

十一郎等も従へ。俱も京師へ遣はなえ。上書啓状の諸文書は、汝等那地へ届いたる。日先ひまく時宜ときを胡この機きを蒞たり。書かく其そのを奉たるべし。素紙すし紙し只ただ花押はなおしと墨印すみいんを拓ひらたると幾枚いくまいの照文しょうぶんを與たまへ。その美辰みしん相清さうせい澄せい相傳さうでんへ首途しゆと見参けんさんの礼儀れいぎのど果はく照文しょうぶん逸時いつじ景能けいのうへ俱も退ひれ。有司ゆうしの黄金こわんと種たねの貢物きんぶつ私ひそ用の米錢まいせんに至いたるまで。漸あくお受合うけあひ。港口みなとの船積ふねづみ入れん。這この使し相従さうじゆふ。右筆みぎふで大岸おほがし法六郎はふろくぢやう並ならぬ野兵のへい十名じゆまい走卒しゆそつ奴隸ぬれい二千餘名にせんじゆりやうまい支役しやく六十名ろくじゆまい都てい。一百名ひやくまい近ちかく船ふねへ。悠ゆ而其その通宵とうしやう東西とうし咸みな許ゆるす。馬うま小駝せうたして終日しゆじつ洲崎しゆさきの港みなと口くち半はん。渡海わたうみの船ふね載のり。程ほどは這この使しの所親しよせ聚あひ。見送けんどうるもの少すく。登時とうじ照文しょうぶん逸時いつじ景能けいのう等ら人々ひとびと告別こくべつ。主僕しゆはく其その曉あつ天あま齊せい一船いつふね乘のる。程ほど折まり。順風じゆんぷう之そのれ。舵工かこ們らの纜かじと解とれ。帆かを揚あげ。西にしを投なげ。走しり。あの日あひの十一月じゆんがつ中な氣きのち。是この是こも。僅わずかに三四日しやうじゆつにちを歴へて。稻村いなむらの城しろ内うちに。隊たいより

武藏相模の方むさし遣はなして敵地てきちの動靜どうせいを撈とり。間諜まんとく見けん。西にし名なが来き。一ひと大事だいじあり。注進ちゆしんも。是この是こも。義成ぎせい主ぬし其その兵へい毎まいを庭門ていもんより縁頼えんらいの下した召よせ。みづからその美をみ。腹はら心こころ股肱こたうの近臣きんしん五六名ごろうまい左右さうじゆ侍さむらいの両家りやうけ老辰らうぢん相清さうせい澄せい等ら其その次つぎの間ま伺候かひこう。俱も其その告つを。是この是こも。別義べつぎおわ。官くわん領りやう扇谷せんく定正じやうじやう主ぬしの道節みちせつ信のぶ乃の毛野けの等らの八犬士はつけんしを酷こく憎にくむ。其その然しかふ。堪たり。武藏相模むさし下總しもすま上野かみの越後えちご五箇國ごかんとくの大軍たいぐんど。當家たうけを伐うん。と議ぎ。是この是こも。則すなは。一朝いちぢやうの所ところ以も。事情じやうけを原もとる。不ふ定じやう正じやうの家臣けしん根角ねかく谷中やちゆう政木せいぎ狛わ。魅まされて非罪ひざいの罪人つみびと河鯉かゑ孝嗣かうじを阿容あゆ々々々々と遁與とんよ。時とき穴栗あなぐし專作せんさく等ら俱も虚氣こ。隨まり。醒さめ。馳かり。五十子いそごの城しろ赴おもむ。那な大刀たの事ことの顛末てんまつを箇様かんざう々々々々と訴う。定正じやうじやう听き。評ひやうり。大おほ刀たの自みづかと迎むかへ。隨まり。其その田で取と。蘭らん二に士卒しよそ幾いく名まい従したがへ。服ふく大刀たの自みづかと迎むかへ。

よとて前岡へ遣しけり。谷中二門が許の皆徒らなる虚言にてあるは、われは、駒蘭二
 名の徒ら五丁子の城へ来て事休々と告ぐ。定正勃然として怒り、堪へず、原来谷
 中二門專作の情地不利なるあり。罪人河鯉考嗣と脱し、るをわれは、いざ、開を
 以、瞞れ、為、おの、風と捕へ影と抱く。大、刀、自、の、事、を、訴、君、を、欺、く、罪、輕、く、罪、重、
 身、へ、ゆ、之、相、從、する。走、卒、以、謀、至、る。緊、急、を、牢、獄、に、閉、籠、て、空、中、で、招、う、さ、る
 よ。と、敦、園、屋、茶、下、知、あ、れ、れ、駒、蘭、二、是、を、奉、り、く、則、谷、中、二、專、作、を、結、紐、と、緊
 急、考、問、を、時、に、谷、中、二、專、作、其、餘、の、夥、兵、を、提、れ、て、畫、の、覺、る、如、く、思、へ、大、刀、自、
 事、不、思、議、と、い、ふ、餘、り、の、狐、狸、の、所、為、り、け、と、思、難、る。開、が、中、の、谷、中、二、苦、い、
 る。聲、戰、か、く、陳、言、す。急、に、其、田、主、を、止、め、て、稟、を、呈、す。と、听、き、那、大、刀、自、
 事、の、由、何、で、偽、を、稟、せ、然、れ、も、主、僕、銷、や、失、せ、ん、往、方、知、る、事、を、い、ふ、事、
 や、う、必、く、思、惟、れ、ば、倘、是、考、嗣、不、親、に、友、の、狐、を、使、ふ、者、を、は、然、然、と、ま、る、幻、術、を、

仍、ふ、者、う、我、毎、を、魅、ら、り、考、嗣、を、掠、奪、り、走、り、去、る、を、あ、ら、ん、ぎ、む、あ、ら、ん、と、
 我、們、が、罪、鏡、さ、る、は、あ、ら、ね、ど、願、ひ、の、權、且、頭、顱、と、假、し、て、放、免、見、ふ、做、ら、ん、專、
 作、並、小、夥、兵、等、と、俱、ふ、樹、を、伐、り、草、を、其、拂、ふ、多、く、佐、と、考、嗣、の、往、方、を、索、す、
 捕、捕、り、呈、ら、ん、其、事、倘、果、し、ら、ば、い、の、折、頭、顱、を、召、さ、る、と、も、御、賞、罰、の、違、ふ、
 わ、ら、ぬ、は、く、と、の、誡、を、守、え、あ、げ、く、愚、意、を、遂、さ、ぬ、い、ひ、と、叫、ぶ、專、作、夥、兵、等、も、異、
 口、同、音、を、陳、し、け、駒、蘭、二、是、を、う、ち、す、と、あ、の、日、の、竹、口、を、止、め、牢、舎、へ、遣、し、て、却、次、の、
 日、を、至、り、主、君、定、正、谷、中、二、門、が、情、願、箇、様、々、と、件、の、一、差、を、守、え、上、り、定、正、
 頭、を、傾、け、て、其、差、定、ま、る、は、べ、し、然、れ、ど、事、小、假、托、と、逃、亡、を、免、れ、料、り、か、ら、ん、權、
 且、谷、中、二、專、作、を、放、免、見、ふ、做、さ、と、も、他、等、果、し、て、願、の、如、く、と、其、事、を、做、し、
 卒、る、ま、る、宅、眷、を、那、身、の、代、と、し、緊、急、に、牢、舎、を、敷、糸、く、開、が、中、の、夥、兵、以、謀、の、
 單、身、を、妻、も、ろ、子、も、る、若、者、の、開、が、男、女、の、胞、弟、兄、弟、小、父、小、母、を、禁、獄、せ、し、事、

忽諸小走へらばとゆふ貌して命ぎれば馭蘭二美り退治儀のどふ執りひく
 却谷中二と專作と隊の兵毎の禁獄を饒して御詮徳々といひ知せ且限は小
 百日をのり。孝嗣を捕捕るまゝ。尚その功る時其身はら宅眷志
 連坐の罪免るべらば勉より。と言示し。皆其縛の索を解允して放免
 兒也をあらけ。是より。谷中二專作の同罪を走卒奴隷を分ち従へ。日
 毎ふ出く。退途とる。孝嗣の在処をまふ。毫も便宜をゆるむ左右も
 程ふ夏ハ過く。秋も又八月の時候より。谷中二の考嗣を緝捕の限り百
 日ふ重とる。小真愛。馭蘭二不就。稟ま義あり。又百日の日延を願ふ。馭蘭
 二も役柄をたへ。谷中二專作と惨刻もあら。生平決同氣相求め。俱考嗣を
 諳らた。小人をた。諾ら。王君の執成宣る。又百日の用捨ある。今茲の冬
 十二月を限り。小功を奏ま。と分付。是より。谷中二專作の二隊ふられ。限

兵を領く。或ハ貌を窺。一名を度。武藏相摸伊豆信濃上野下野常陸下
 總ま。約三四十里四方の漏を隈。孝嗣並那那幻術とよ。まる者や。あそ。
 悄悄地小穿。數奪り。索のけ。既。十月の盡まで。照驗と。り。俱。五十五子の
 城。か。又近郊を求。獨る程。十一月の初旬。不至り。料。黒田河の邊
 や。那餘類一人を捕。捕り。其故。什麼と。尋る。武藏野。程。遠。ら。那
 穂北。落。點。餘。之。七。有。種。今。茲。の。夏。四。五。月。の。時。候。八。犬。士。別。れ。後。も。義
 父。氷。垣。残。三。夏。約。の。重。病。小。拘。ら。し。妻。の。重。戸。共。侶。一。日。も。暇。る。ら。け。後。看
 病。の。幼。勞。そ。の。り。ひ。る。九。月。中。旬。某。の。日。小。夏。約。の。身。故。り。け。重。戸。が。哀。悼。い。へ。ど
 け。安。甚。の。事。七。七。の。追。薦。お。又。幾。許。の。日。を。過。ら。又。十。月。晦。日。中。陰。稍。果
 去。六。の。日。有。種。の。重。戸。小。向。ひ。曇。裏。八。犬。士。の。徵。れ。安。房。へ。赴。死。し。り。親。の。看
 病。暇。あ。ら。い。ま。一。日。も。安。不。と。の。向。ひ。且。故。翁。の。病。臥。の。時。里。見。殿。より。人

茂を賜り義をさへわれ安房へ使を遣りて八代氏の人々の翁の死去を告ぐや
 と思ふに什麼と商量をせざる重戸の敢異議ありきまう候べしといはせ有種
 其次の日十一月八代士並ふ、大照文等不與不況消息二三通を書寫り且此の
 人情を準備せし老僕世智小才二の使を分付く其十月三日の朝いそ
 が立ち出づ遣りけり這世智小才二の曩大角現八の事ありしより八代士
 相識られし且心利する者なれば有種よの使を課する胡意二人を用せしむ
 他見を憚る書翰多し他路中不慮の急病ありとも一人は先へい免
 為せ悠い心を用ひし然世智小才二俱小逆旅の準備をあり其朝早天
 穂北の宿所を立ち出づ墨田河原まで來りける程小才二猛可小腹痛と
 堪りて走りぬる小才二の地方の賣津船公多蟻益利八と喚做さ
 者世智小才二父られ權且開里小立寓く將息して瘵六亦復路をいそ

ぐと俱小梨八許赴き事由告主人の老波女あるゆて先小才二を懇
 勤る地炕の邊臥しめ丸茶を薦め湯を與る程小才二下痢水
 瀉して圍金暢ふと煮くや昨宵首途の欵び小朋輩酒と沽せられ
 去折喫過したる出宗るんと云左右して小才二腹痛水瀉の愈いを夕の日
 早く散れ下疇ふりし時主人梨八も賣津上より來り老波と共侶
 この二客を抑慰めり今よりとも二里の過港今宵の枉く這里曉して
 明日風出くゆめと老波の酒菜を買ひて來り梨八も酒と湯置て俱世智
 小才二小才二薦めけり然れども小才二病後るれと尋く治喫まを利八世智
 小才二叔侄の送の嗜む狂水るれに献酬れつ喫程利八も世智小才二の安房へ
 使小立られと尋くその所要を問ふ世智小才二の醉小乘して八代士の上を坐る
 道節信乃を首め孰も勝り劣るる武勇力藝箇様々々と聲喋々



八代傳九郎卷三十一

六

○文楽堂藏

自秀



止め候ひも
 切つゝも係
 みやくも足と
 ち場此あつ
 ゐむ著作堂

八代傳九郎卷三十一

○文楽堂藏

説誇る。小才二傷痛く。只顧小目を注せ。又其袂を掖む。と。情地小言
 辯を制れども。世智小尚曉得ら。諄復ら。暗りけの信り。程小根角谷中二
 穴栗專作の日の。孝嗣の在処を。知る便り欲得と。同罪放免の。野兵十五
 六名を。従へ。終日遐途を。徘徊あり。其。曠昏小心とも。主僕利八の。門邊。或
 過る程。折ら。家内。世智小八犬士の。姓名を。倡。武勇を。説誇る。聲高。や
 小。谷中二。門の。誅ら。俱小外面。穴。竊聞。その。よ。と。知。欲。小。足
 則。犬山道節。大塚信乃。們。小。由縁。ある。者。多。と。猜。谷中二。們。合。咲。の
 肚裏。小。思。小。那奴。們。我。索。河。鯉。孝。嗣。の。支。黨。を。も。那。犬。山。道。節。大
 塚。信。乃。大。阪。毛。野。們。の。曠。昏。小。我。君。小。寇。一。て。五。十。子。の。城。を。火。攻。め。け。結。城。煉。馬。の。殘
 黨。今。那。奴。を。擯。捕。く。敵。に。て。其。在。処。を。知。る。と。我。の。必。足。我。們。が。罪。を。償。ふ。小。足。ら
 ぬ。と。思。小。心。を。野。兵。も。其。に。示。一。て。兩。隊。小。う。向。專。作。の。背。門。の。方。谷。中。二。門

邊より。一度。小。吐。と。稠。入。る。耳。を。串。く。聲。耳。高。く。や。れ。極。見。正。可。小。歩。扇。谷。殿。の
 御。説。を。禀。て。惡。犬。士。の。支。黨。を。緝。捕。の。頭。人。根。角。谷。中。二。穴。栗。專。作。の。在。処。を。索。小
 被。れ。と。喚。れ。敬。馬。に。怕。る。世。智。小。利。八。老。婆。も。共。侶。小。跪。時。酒。醒。て。俱。小。云。云。と。陳
 まれ。も。谷。中。二。を。不。分。説。を。听。く。野。兵。小。下。知。一。て。轉。々。と。主。客。二。名。を。結。紐。せ。け。開
 ぐ。中。小。才。二。心。早。に。著。る。れ。緝。捕。氏。の。ら。入。り。一。と。小。窟。方。小。身。を。倚。り。壁。に
 落。る。処。より。衝。と。推。破。り。底。向。小。脱。れ。出。り。穂。北。を。投。げ。飛。び。似。小。逃。亡。せ。し。谷。中
 二。專。作。野。兵。等。も。事。小。紛。れ。知。ら。け。り。信。而。谷。中。二。の。野。兵。小。下。知。一。て。世。智。小
 と。利。八。小。十。を。辱。中。に。せ。り。只。那。道。節。信。乃。の。在。処。を。根。穿。り。垂。小。欲。り。主。僕
 と。向。小。利。八。丈。婦。の。八。犬。士。を。よ。も。知。ね。小。又。世。智。小。左。右。と。頼。陳。小
 たり。けれども。谷。中。二。敢。実。と。せ。し。兩。箇。の。約。裏。ある。を。見。出。し。て。野。兵。小。披。り。檢。査。小
 果。して。内。小。落。點。餘。之。七。有。種。が。八。犬。士。小。贈。る。書。翰。あり。且。其。書。中。小。河。鯉。佐

太郎の政樹又政木作。大全孝嗣石龜屋次園太卿。之共結城の左右川を入
 水の事と悼む見えたる。又里見の家臣蛸崎十一郎照文と、大法師寄
 一通の謝書もあつた。谷中二專作們が歡びあつた。則ちの書翰三
 通を照据として、奇鋭く世智介と拷問せしめ、世智介遂に脱路を有種
 素生と首めて、道節信乃們の八武士八、曩久、落船の家寓居して復讐の
 事あり。後里見殿不徴れて、皆共侶不安房へ赴けり。又河鯉の政木大全孝嗣の
 曩死の死刑及び折大江親兵衛不解返して、其幫助とされ、則伴れて上總小到
 して素藤と征伐の日、孝嗣も軍功あり。又親兵衛不伴れて、次園太卿と喚做
 して浮浪人と俱不結城へ赴く路の程、左右川橋を憶る。敵の鎧砲不撃墮
 されて死活を知らざり。と云豫する那噂も招りて、又小可の老僕小才を喚
 做者と俱不安房使不立られ、小才不腹病發りて路去ぬ。小可

小父をける。這利水八許立りて、將息の為不日と銷せの。然然那大士の孝嗣とやらる。
 小父の可可の聊も干渉らぬ。で饒させらる。と勸解る。谷中二うちやる。
 原来其小才二奴も皆一網不捕る。りの知さりて走り。其奴穂北に逃がりて。
 告る有種の逃亡と疾推蒐て捕らんとし。先世智介の穂北の光景と身。
 向ふ世智介答て然し。一邑約二百餘電あり。皆豊嶋の殘黨也。莊容るれも武
 藝を嗜むて有種の不屬さるる。曩大山道節の復讐と幫助る本事也。
 知召れる。といはれて谷中二躊躇て現る。今這小才も推寄さる。と効
 る一圓五十子へ立りの是もの事の趣を上へ。御下知る依りて專作諾
 然らば夥兵四五名を留在す。地方の長を召せて家を守りせん。の居る
 人々の怨をあらるて。宣示して谷中二俱十個許の夥兵們世智介と梨
 八丈婦を牽立させる。蕉火路を照して五十子の城を投てをける。有任程小才

ト。よひ。ま。なき。こ。二六の甲夜の間の穂北へ来る。則東人有種夫婦中途の禍事箇様々々。世智介の小父梨八の宿所。扇谷家の緝捕の頭人根角谷中二穴栗專作と喚。做る一隊約十七八名の猛者の為小捕捕られぬ。故の箇様々々と御向小黒。河の邊中。小才二が腹の病着發り。故小世智介の小父梨八許立より。權且將息ある程。小世智介の管待酒の酔小兼せ。口の外。八犬士のゆきも説誇り。其聲洩れ。那禍鬼不遇。云其事の際略と喘々告知。され有種つら。ち。重戸をたすへ。山主の復讐の後。那討隊の寄や来ぬ。犬士の母故翁と俱小敵と待。か。事洩され。安ら。今番救ふ。八犬士の安否と訪。欲。我使休より事發覺れて。苗害立地。及。是則天之命。討隊向。矢種。防戦。免れ。家火を放。腹。研。今。怖。と。推林。悠思欲。勇士の本性。理。死。易。難。憶。其。

根角谷中二とやら。一隊僅十七八名。今宵推寄せ来。他。必。五。還。七。勢。従。出。更。七。夢。朝。開。不。果。豫。知。如。下。總。援。嶋。山。院。住。持。の。法。印。の。奴。家。が。先。妣。の。弟。也。出。家。不。似。は。義。侠。也。と。豫。言。す。據。乃。且。境。内。の。廣。一。い。這。里。人。を。送。も。く。伴。以。乃。馮。心。と。果。も。必。舍。藏。れ。ん。權。且。那。里。時。を。俟。て。恥。を。雪。る。便。直。も。つ。人。憐。れ。と。戦。殺。せ。り。と。勇。士。の。與。言。不。做。後。の。上。志。を。と。詞。雄。々。と。諫。有。種。沈。吟。下。頭。を。拾。は。領。領。然。大。い。り。れ。其。理。也。今。我。躬。方。二。百。餘。名。敵。の。三。倍。五。倍。せ。ん。寡。を。り。勝。も。躬。方。不。戰。殺。む。と。言。ふ。を。殺。し。て。名。を。成。せ。と。仁。人。義。士。の。為。る。所。現。立。退。く。と。言。ふ。下。因。て。憶。ふ。今。我。里。人。と。兵。侶。不。徑。小。安。房。へ。赴。て。八。犬。士。を。憑。と。見。殿。不。仕。へ。ん。と。易。り。給。べ。れ。と。大。敵。寄。る。と。知。り。て。戦。む。と。退。れ。恥。を。思。ふ。阿。容。々。と。今。中。安。房。へ。召。れ。ん。と。一。圓。下。總。へ。退。れ。後。亦。主。張。せ。ん。と。小。才。二。暗。號。の。見。と。吹。鳴。し。て。里。人。等。を。疾。集。合。す。

やと小才二あるゆゑ柱下吊る法螺掻合せて走り出さ吹立々々事の火急を御
 知まれ穂北一柳の莊客百十數名あけ竹槍連枷を引提ぐ時を待たず走
 下總の皆有種書院の廣庭へ基石の像來會く有種縁頼立出て那凶
 變と告知せ且敵の英氣と避んと與一圓躬方の衆人を伴下總其の山院
 いると思ふ事情を詞急迫しく説示其大家皆うち散馬く開ぐ中其の故老兩
 三名詞ひとく答るや故東人氷垣翁の時より我門皆御庇せて各宅眷と養
 ふ今日に至れるは憐る時誰う異議せん死生とも生るとも東人の隨意を
 背れまらんやといへ大家異口同様に別議するとも答合ける有種是をうち
 各々の早く宿所を走りかへて要用の家仗財宝と或馬不駝と或初不楯と皆共
 侶今宵の中千住河原へ必去那河原に我舟船の大平駝二艘ありそれ
 足るはあわね他船載り方とも便直と以その船の價を船主取と或又

馬あつた駝して歩初よりももきん夜も明は五十子より討隊の大勢推寄
 せまて脱落せむとといふと準備の金二百兩あり件の故老等不慮與
 去りて大家孰う感せざるは相あるゆゑいと心も果て共侶の身を起し外
 宿所を投て走のける登時亦有種の小才二と家の農人の心利と迅行を四五名
 急召とせしめ若門の今より家仗を河原へ運出せ我舟船載り方河
 邊不遠見して五十子も刃心圖の城の士卒はれ討隊の大勢來ゆと見え早
 穂北へ走り還りて里の家毎火を放て烟紛れ立ちて歩初より我投下總
 那山院へ尋て來よ樹後れ敵の為の慮せられて後悔する勉めかと教言
 下總其の路費を取せも配早く定りて是より家仗をとり舟を重戸が指揮
 従ふる一家兒の奴婢もど在り者若く一霎時の程馬不駝と或長袴楯不楯
 或或不裏と初不楯と千住河原へ遣りて舟を約莫二時有餘不て要用の什物

皆大平駄の多船二艘不載けの介程。這穂北の庄客も各宅眷と共に家伏を
出。来て船不載るとも。特小夜長は時候する。當時の河邊の曠々る郊原中
叢最立たる枯葎の人の煙猶遠ければ是を知る者も有り。既して一村落の里
人も東西咸出。果一が流不従ふ者の笠高を操り歩も行く者。馬を牽て有種重
戸奴婢と俱み下總を投て死けり。并が中。小才二有種の家。農人四五名。河の前
面。立明。敵の討隊の寄せ来身。今。快くと。侯程も。夜の皎々と明けり。話
分。両頭。当晚。根角谷中。元栗。専作。の夥兵。世智。衆。と。梨八。夫婦。と。牽。せ。路
次。とい。程。近。く。な。れ。五。三。刻。時。候。五。十。子。の。城。か。り。来。り。馳。せ。箕。田。取。蘭。二
宿。所。不。免。慌。忙。一。敲。は。喚。覚。て。則。取。蘭。二。那。有。種。三。通。の。書。翰。呈。上。
事。の。既。未。略。と。告。て。い。さ。う。御。當。不。在。下。名。の。里。墨。田。河。の。邊。邊。を。賣。津。船。公。蟻。屋。梨。八。が。宿
所。也。穂。北。の。御。士。落。點。餘。之。七。有。種。と。喚。做。を。者。の。老。僕。世。智。介。並。梨。八。夫婦。

擄捕けるふより。河鯉孝嗣。往方。又。那。犬。山。道。節。大。塚。信。乃。大。阪。毛。野。等。八。個。の
悪。黨。の。在。処。も。事。詳。し。知。れ。然。當。夏。前。面。圖。の。法。場。也。河。鯉。孝。嗣。と。掠。奪
去。幻。術。兒。ハ。元。自。道。節。即。ち。伏。家。の。悪。少。年。犬。江。親。兵。衛。と。喚。做。を。者。と。云。世。智。介
が。招。了。不。し。在。処。を。敵。の。皆。是。仕。令。里。見。不。在。獨。孝。嗣。が。存。亡。詳。る。ね。也。他
水。馬。水。技。を。と。る。者。れ。ハ。水。も。も。も。溺。れ。七。那。親。兵。衛。と。共。侶。不。仕。安。房。不。在。也
欲。是。も。亦。知。る。べ。し。却。那。落。點。有。種。道。節。信。乃。と。相。決。り。て。あ。の。春。當。城。不。乱。妨
去。り。逆。賊。の。一。人。也。も。下。の。歹。人。一。百。餘。名。と。俱。不。穂。北。の。莊。不。在。皆。是。豊。嶋。信。盛。の。殘
黨。之。の。尾。餘。也。空。知。一。徑。不。穂。北。打。向。て。擄。捕。も。思。ひ。か。ど。我。統。率。隊。兵。を
り。く。一。百。有。餘。の。強。敵。を。搦。ん。と。易。ら。ね。備。心。推。鎮。也。い。そ。か。か。の。必。死。の。心
是。等。の。趣。を。言。上。わ。一。期。の。幸。ひ。御。執。成。を。ね。死。ま。う。と。卑。下。慢。心。鼻。鼻。春。蟬
め。り。て。説。誇。れ。取。蘭。二。所。其。書。を。閱。し。且。今。宵。の。拵。を。答。言。る。と。大。く。驚。か。す。

猛不獄吏を召上りて。世智八と利八夫婦を牢獄へ遣へる。程不城の鶏の
 數鳴く。朝霜白く天へ明けり。徳而箕田馭蘭二ハ早天より出仕して則主君定
 正有種が書を呈上りて根角谷中二穴栗專作們が大功の事の顛末を
 隨ふ漏をとり生拘世智八夫婦の及道節信乃等の八犬士の在る
 且河鯉孝嗣の事又落點有種の事首より尾まで谷中二專作們が潮心
 趣を言詳ふ告。定正歡び氣色を見え。則馭蘭二命を奪。根角谷
 中二穴栗專作們の。孝嗣を捕はる。其往方を穿鑿盡く且逆
 賊道即信乃毛野等の支黨なる。穗北の御士落點有種が老僕世智八並
 世智八が小父蟻屋梨八夫婦を昨宵墨田河の邊に擲捕。口を塞ぐ。其
 其功莫大とあり。他第一隊の舊罪を皆赦免せん。職祿故の如く。其
 一就他等代て。禁獄ある宅眷親族も饒。一して宿所へ還。ね。そ。

猶急ぐ。兎の逆徒有種を討隊の一。今日穗北へ緝捕使を馭蘭二
 汝と谷中二を兩頭人と。穴栗專作を軍監とせん。遣兵三百名を從へ。早
 穗北へ打向。一人も漏さず捕らね。時後れ。逃れ。亡。せ。下。の。を。取
 蘭二上首を退りて有司と相共。谷中二專作們を召上り。舊罪赦免の
 恩命と有種を討隊の頭人。一。ある。君命を云渡。谷中二專作隊の兵
 迨天へ升。心地。肩を尖り。脰を張り。俱。專作が宿所集合。先
 武具をを敷正へ。介程。其田馭蘭二ハ。益可。士。百名を召取。へ。人
 中。飽。ま。る。戦。飯。を。喫。せ。馬。の。糞。を。豆。草。を。飼。ふ。谷。中。二。專。作。者。と。俱。不
 是。を。領。る。五。十。子。の。城。を。出。一。辰。牌。の。初。刻。を。連。り。路。次。を。行。り。ど。も
 五。十。子。と。穗。北。と。阪。東。路。二。四。十。里。一。野。の。程。を。既。不。已。の。五。刻。を。時。候
 稍。千。住。河。を。渡。せ。程。不。忽。地。穗。北。の。方。へ。下。り。黒。洞。天。の。沖。り。猛。火。煽。々

と燃升るを。馭蘭二谷中二專作等と俱。前。面。遙。小。瞻。仰。く。原。來。逆。徒。の
 自焼して。逃亡るを。あ。七。あ。ん。ぎ。む。む。捕。る。漏。し。を。兵。毎。と。喚。り。馬。小。拍。れ。く。葛。烏。直。の
 走。り。し。ら。穂。北。の。莊。亦。あ。見。れ。ば。一。聚。落。の。白。屋。幾。と。も。み。く。比。目。火。の。被。る。限。由
 わ。ね。ば。輒。く。ら。ち。も。入。ら。れ。半。分。焼。落。後。小。士。卒。と。找。り。俱。小。打。入。て。檢。査。す。
 自焼の屍骸一箇もあらず。只。近。村。の。莊。客。等。が。火。を。滅。禁。ん。と。退。途。より。走
 て。聚。り。を。馭。蘭。二。谷。中。二。号。有。種。が。支。黨。を。ん。と。或。は。斫。伏。せ。毆。倒。し。矢。場。の
 索。と。被。る。者。二。三。十。名。を。り。く。ば。餘。の。怕。れ。て。逃。去。り。け。り。ま。の。奉。や。定。正。里。見。を。怨。と。て
 竟。小。水。陸。兩。路。の。大。軍。を。起。し。是。其。事。の。張。本。次。分。教。あり。蠻。觸。戰。場。異
 魏。似。蝸。牛。角。上。誰。祈。風。乱。れ。蘆。へ。治。れ。る。江。の。か。ら。角。中。も。渡。せ。兩。國。の
 橋。の。詩。詞。の。意。を。知。ま。く。欲。せ。下。回。り。次。々。を。解。分。る。を。聽。ね。か。し。

南總里見八犬傳第九輯卷之三十一終

